

## 穴居想見(編集後記)

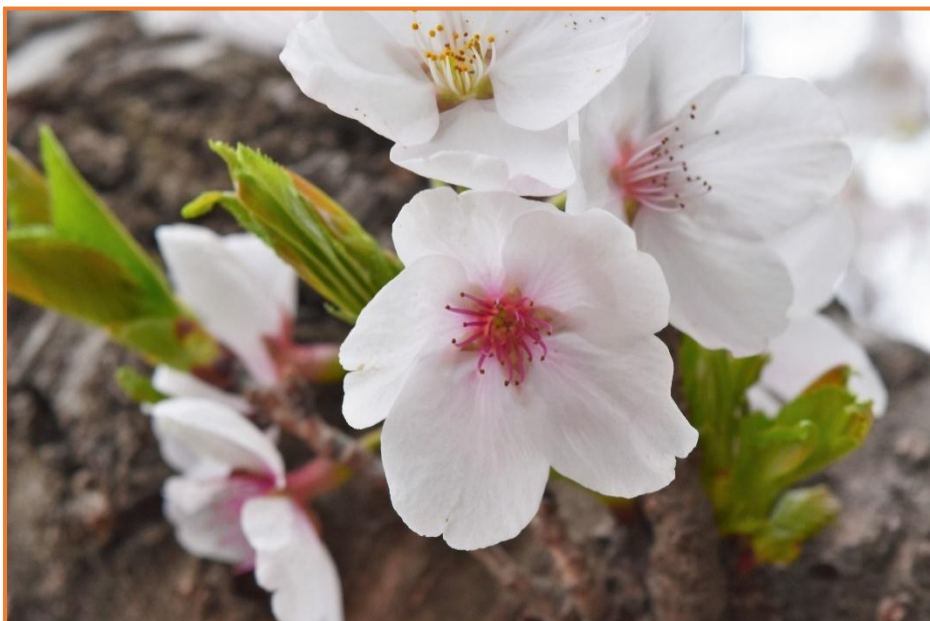
杉や檜の花粉の飛散がものすごい。笠山や堂平山、空も黄色く霞んで見えている。記録的少雨であった冬から北風は吹き続けて、空気はカラカラに乾燥しているので、木の芽起こしの雨が欲しい。私の鼻腔内は鼻水が満ち満ちタラタラと流れ落ちて止まらない。一日一箱のティッシュを使い果たして、マスク、抗アレルギーの飲み薬、点鼻と点眼薬が必需品となる。

一説では、花粉症罹患者の勤務中の集中力低下による経済損失を試算したところ、一日当たり2340億円になるという。それを受け、国や各都道府県の林業試験場が連携して、花粉の少ない品種の開発・育苗に取り組んでいる。しかし、林業従事者数が全国で4万4千人と極めて少なくなった今日、全ての杉・檜の人工林がそれに代わる日は甚だ遠いと思ひ憂鬱になる。

一方、早咲きの河津桜の開花が報じられるようになると、神代曙や染井吉野の開花も近い。妙に心ときめいてくるのは、私だけか。そして、この年度末に私は役場勤務とサヨナラします。本誌の編集からも離れることとなりますが、引き続きご愛読願います。

古人無復洛城東(こじんまたなし らくじょうのひがし)  
今人還對落花風(こんじんまたたいす らっかのかぜ)  
年年歳歳花相似(ねんねんさいさい はなあいにたり)  
歳歳年年人不同(さいさいねんねん ひとおなじからず)  
寄言全盛紅顏子(げんをよす ぜんせいの こうがんし)  
應憐半死白頭翁(まさにあわれむべし はんし はくとうのおきな)  
此翁白頭眞可憐(このおうのはくとう しんにあわれむべし)  
伊昔紅顏美少年(これむかしはこうがんの びしょうねん)  
(唐詩選「代悲白頭翁(だいひはくとうおう)七言古詩 劉廷芝」)

編集責任者 鈴木春酔



花開けば風雨多く、人生は別離多し

## 穴居想見(編集後記)

新玉の年は、60年ぶりの丙午となった。十干の丙は陰陽五行説では火の陽である「え(兄)」と「と(弟)」であり南方を指すという。また、十二支では午(馬)にあたる。明るい兆しはないものであろうか。馬は大昔から人間にとって有用な動物であるため、平時には農耕や人員や貨物の輸送を手伝い、競馬では大観衆を熱狂させ感動を与える。また、戦時には槍などの長柄物や弓矢を持つ武将の乗り物や複数立てにして戦車として使われた。

そのため、馬の姿をロゴマークにしたものはたくさんある。日本国では生きた馬を神様に奉納したことが始まりだとされる、「絵馬」に代表されよう。ビールの麒麟も一日に千里を駆けるという瑞獣を用いている。自動車ではイタリアのフェラーリやドイツのポルシェが跳ね馬をエンブレムにしており、アメリカのフォードマスタングは大草原を駆ける野生化した馬の呼称を車名に与えエンブレムにしている。スコッチウイスキーには白馬と命名されたものがあり、日本のとある芋焼酎のラベルには、中国の三国志演義に登場する一騎当千の猛将呂布(りょふ)が乗り美髯公関羽(かんう)の愛馬となった赤兔馬(せきとば)が使われている。第2次世界大戦の米軍の最高傑作と評価される戦闘機のP-51もマスタングと称した。

一方、戦が無くなり平和であるからこそ連綿と継承されている神事もある。それが県指定無形民俗文化財「萩日吉(ひよし)神社のやぶさめ」。これは、ときがわ町の西平地区で今も行われている。伝承によると、平安時代末期に木曾から上洛し瞬く間に平家を京から追討した、朝日(旭)將軍源義仲の家臣と伝えられる明覚郷(現ときがわ町)の三氏と大河郷(現小川町)の四氏が、約800年前に奉納したことが始まりと伝えられている。番場という地名も各地にあるし、駒ヶ岳という名称も各地で付けられ、白馬岳もあり馬にちなむ名は相当なもの。

可愛いウマ娘が疾駆し躍動するような、良い年になれと願うばかり。

編集責任者 鈴木春酔



八宮神社の絵馬は下駄の形をした珍しいもの



## 穴居想見(編集後記)

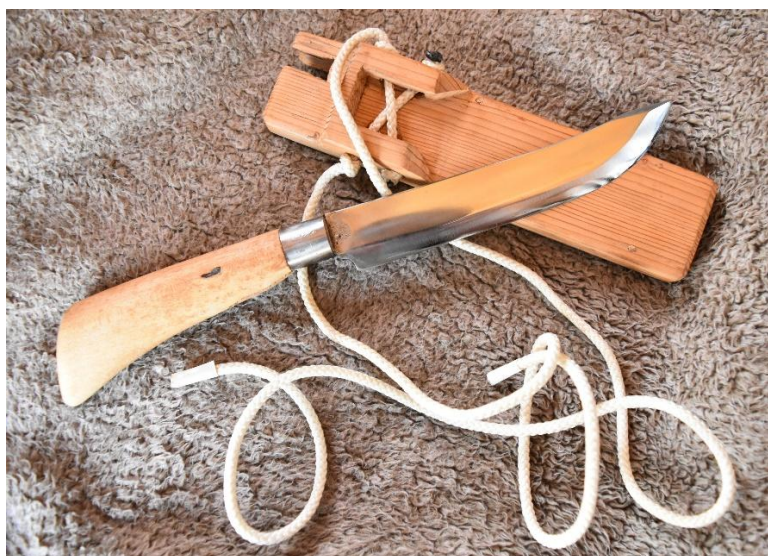
このところ、熊による人身被害や農作物の被害が毎日のように報道されている。東北地方では狩猟を生業としていたマタギの人々から、「イタズ」と呼ばれ、山の神からの神聖な贈り物として熊は位置付けられていた。稲作のできない山国において野生動物の肉は、日ごろは口に入ることのないご馳走であり、毛皮は防寒着となり、胆のうを丁寧に乾燥させた「熊胆(ゆうたん)」は、飛鳥時代から漢方薬として利用されてきた。北海道のヒグマも同様に、人を襲わないものは、アイヌの人々からキムンカムイ(山の神)として崇められていた。

現代、狩猟が廃れたとはいえ、熊の生息数が大幅に増えているとは思えない。それよりも山岳信仰が薄れてしまい、熊が暮らしていた自然豊かな深山幽谷を人が切り開いて道路を通し、観光地化して生息域を狭めてしまったからではないだろうか？熊は雑食で、冬眠から覚めた春先は根曲がり竹などの植物の新芽を食べ、冬眠に入る前はブナやドングリなどの堅果を食べているという。ところが、それらよりも柔らかくて高カロリーの生ごみや有害鳥獣駆除で山中に放置された獣肉に味を占めて、人里は怖い場所だという遺伝子が薄れ、山から下りて人の居る所に行けば、必ず食べ物にありつけることを学習してしまったのではあるまいか。

熊やサメが人を襲うと人喰い熊とか人喰いザメと大騒ぎになる。被害に遭われた方々にはお見舞い申し上げたい。しかし、人だって熊やサメを捕食してきたし、醜悪な姿の鰻も蒲焼にし垂涎して喜ぶなど、ありとあらゆる動植物を貪欲に食べてきた。食べられる側のものたちは被害者なのであるが、調理して食事を頂くたびにその命に感謝する敬虔な人は少ない。

ところで、化学者ノーベルがダイナマイトを発明すると、その凄まじい破壊力つまり殺傷力から戦争用の爆薬として大量に生産消費され、彼は死の商人として巨万の富を築いた。一方、自然界の動物たちは弱肉強食のなかで本能のままに生きているが、余分な殺生はしない。人は、ときとして無差別に殺戮を行い略奪し、猛獣すら比ともならない鬼畜と化す。荀子が唱えたように、人間は生まれながらにしてその本性は悪だとする説に深くうなずいてしまう。

編集責任者 鈴木春酔



秋田の阿仁マタギが使う「ナガサ」と呼ばれる剣鉈。柄の部分が袋状になったものもある。火縄銃のない時代は、熊と戦うための槍として用いられたという。

## 穴居想見(編集後記)

独裁者が統治する国は、いずれも戦争を好み領土を広げようとする。その一族の者たちも驕り高ぶり、それを諫める忠臣は排斥され、甘言ばかりを奏上する奸臣だらけとなる。

古代中国春秋時代の思想の一つ兵家。現代でも有名な孫子の兵法書によれば、百戦百勝は善の善なるものに非ず。戦は国民への不義不徳であり、決してするなと何度も戒めている。それには、自国の偽情報を他国に与えて欺き、スパイによる諜報・工作活動を積極的に行い、優秀な臣がいたらば金品を贈りつけ内通者に陥れ、敵を油断攪乱するために必要な費用は惜しまずに支出して、戦は回避せよとした。また、やむなく出軍する場合も、絶対に勝つべく、彼我の戦闘力・士気等を客観的に分析し、地勢・地形・気象条件などの行軍・退却の好機を綿密に模擬し検討を重ね、経済と人命の損失を大きく上回る戦果が得られる場合のみと限定した。

この兵法書を、まだ弱小国であった呉の將軍伍子胥は高く評価し、孫武を軍師に迎え、呉を春秋五覇の強国にすることに大きく貢献した。その後、呉王闔閭が越との闘いで負った傷がもとで急逝する。次王の夫差は暗君であり戦を好み、功臣伍子胥と孫武の諫言を嫌い遠ざけた。孫武は王を見限り呉を去る。執念深い伍子胥には名剣を下賜して自殺に追いやった。

伍子胥の予言のとおり、越王勾踐は、会稽の恥を忘れまいと肝を嘗め一菜の食で満足する生活を送る。臣下にもへり下り病気を見舞い不幸があれば弔問して信を得つつ、密かに国力を高め続た。呉越は戦うこと三度、越王勾踐は遂に会稽の恥を雪(すす)ぎ、呉を滅ぼした。

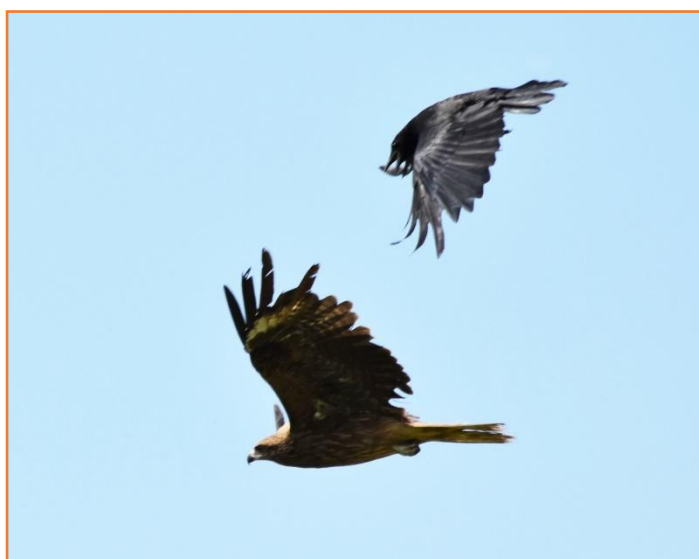
鷓鴣巢於深林 不過一枝 偃鼠飲河 不過滿腹

しょうりょうしんりんにすくうも いっしにすぎず えんそかわにのむも はらをみたすにすぎず

(莊子 逍遙游篇)

たった80年間、戦争と無縁となっただけで平和ボケした、「日本国」に生まれてヨカッタ！

家を持つとしても、屋根と四立の壁があり風雨がしのげればよい。深山にいるミソサザイを見なさい。巣作りに使うのには、たった一枝ではないか。胃もたれをするような、ご馳走は求めまい。河に棲み水を独り占めできるカワウソでさえ、のどを潤せば満足としている。



編集責任者 鈴木春酔

カラスとトンビは呉越のように陰悪の仲

## 穴居想見(編集後記)

雨後の竹の子は、地面を突き破りまっしぐらに勢いよく伸びる。まさに破竹の勢いだ。食用として重宝される孟宗竹も可食できる期間は非常に短い。アクの少ない真竹にしても然り。すぐに伸び切って硬くなり食べられなくなってしまう。さらに厄介なことに、繁殖力が非常に強く地下茎をめぐらし周囲の畑や里山に侵入し、数年で竹林に変えてしまう。

特に真竹はそのまま茅葺屋根の屋根裏材やお馴染みの「竿や～竿竹～」として洗濯物の干し竿とか、海苔やカキの養殖用の筵(ひび=支柱)や筏や小舟を操るために使ってきた。また、加工しやすいため籠や細いヒゴにして簾に編まれたり、提灯や和傘にも使われるなど、我ら大和民族の生活を何百年も支え続けてきた。

今、突如としてその竹を厄介者にして憎むなど何とわがままで傲慢になったのであろう。私は冷たい蕎麦や饅頭が好きなので馴染みの店に食べに行くが、その店のセイロは使い込まれて角の木地が見えかかった方形の黒漆のもので、水切り用の敷き簾は当然竹製である。しかし、たまに飛び込んだ店のセイロが朱色の合成樹脂製で簾も薄緑のプラスチック製であったりすると途端に、美味しさ感じなくなるのは私だけであろうか。

編集責任者 鈴木春酔



## 穴居想見(編集後記)

最近のテレビニュースを見ていて、つくづく感じたこと。それは、現代社会になっても自国の権益のみを求め、他国に軍備を誇示して覇道を突き進む暴君は敵対国を無理やり創り出し、兵器を試したくてウズウズしている。どれだけの血をこの大地に吸わせないと気が済まないのでしょうか？本当にホモサピエンスは、霊長類の頂点に立ったのだろうか？

また、自然を破壊し動植物を搾取し続けた挙句、ここ数十年前から急に温暖化を防止するために森林破壊を止めて二酸化炭素を削減しろとか、鯨や本マグロなどの海洋生物を保護しろとか騒ぎ出した。そして、自国の歴史をかえり見ず自己に都合の良い主張を繰り返し平然と他国を非難する身勝手さに閉口する。

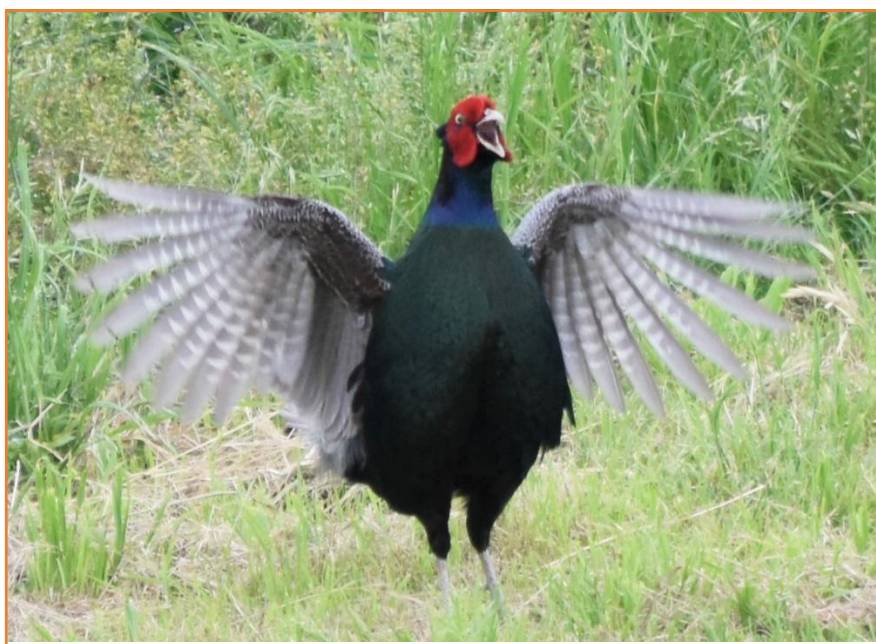
そもそも、地球は心など持たないので、自然環境がどうなろうと、動植物が繁栄しようが滅亡しようが知ったことではない。どうでも良いことなのだ。ちょっとだけ賢いと思われるヒトたちが、地球を擬人化して心配しているだけで、わが末裔を残すための警告と願いでありエゴイズムにも思える。他の動植物にとっては、あまりにも悪知恵が付きすぎて傲慢になったホモサピエンスは滅びた方がありがたく、地球環境にも優しいのではないか。

そのようなことを考えていたら、とても憂鬱になる。列子(れっし)という、およそ二千四百年前の中国の古典の寓話によると、杞(き)という小国がありその国の一人が、空を見上げては天空が落ちてきて地が壊れてしまうのではないかと、寝食を忘れ嘆き憂いたという。私は酒を飲みながら、昨今の天変地異やミサイルを飛ばして喜んでいる人物のテレビ画像を見るたびに、本当に天を裂き地を崩壊させてしまうのではと、杞人のように憂いてしまう。

世の中を 憂しとやさしと 思えども 飛び立ちかねつ 鳥にしあらねば

(万葉集巻五 八九三 山上憶良)

編集責任者 鈴木春酔



## 穴居想見(編集後記)

冬将軍の行進が衰え始め、春の気配が路傍の草木に見えてきた。しかし、杉の花粉が大量に飛散する季節でもありとても憂鬱にもなる。コロナ、インフルエンザ対策のため、ずっとマスクを着け続けており、さらに五月の連休明けまで昼夜マスクをすることになるのか。もうウンザリだ。



杉や檜は製材加工がしやすく、戦前から戦後にかけて建材の需要が高まり全国で一斉に大規模植林が行われた。しかし、戦後、輸入木材の関税を撤廃したことから、安い外国産材に押され国産材の需要が急落した。また、火おこしや後始末に手間のかかる薪や木炭が敬遠され、石炭・石油やガスなどの化石燃料に依存するようになり、里山も薪炭林として活用されなくなった。

その結果、広く林業分野はすたれ、育林には不可欠な下刈りや枝打ち、間伐作業などの過酷な山仕事は引き継がれることなく放置されたため、木々は藤やアケビなどのツルに巻付かれたり枝葉に陽が届かず風通しが悪いため弱り、用材になる前に枯死することになる。やがて表土が流出して保水力がなくなり土砂災害を誘発することになりかねない。

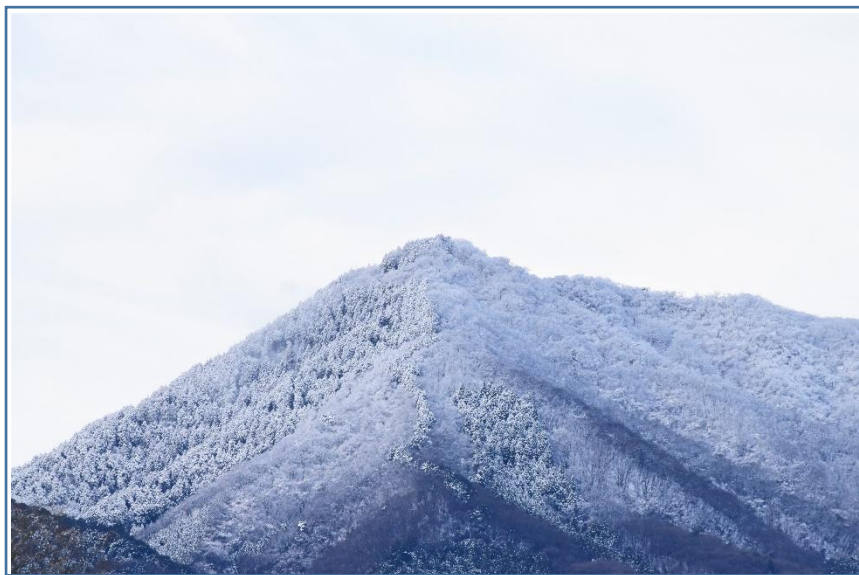
ここ小川でも昔は林業が盛んであったことから、その木材を加工する製材所も多くありそれを商う材木商、建具や木桶を作る職人もたくさんいた。すると鉋や斧、農具などの刃物を打つ野鍛冶もそこに生まれたが、林業の衰退とともに鍛冶屋も桶屋も廃業に至った。

ほかにも昭和30年代に消えていった懐かしい業態の一つが、豆腐売り。頑丈な黒い自転車に乗り、ラッパを「ト～フ～♪」と吹き鳴らしながらやって来たものだ。納豆売りは、「ナット～！ ナット、ナット～！」と声を張り上げながら引き売りに来た。注文を受けると、目の前で器用に経木を折りその中に納豆を詰め、正三角形にして練辛子を隙間に塗り込む。また、話し上手で愛想の良い越中富山の薬売りのおじさんが年二回、置き薬の補充をしに黒自転車の荷台に大風呂敷で包んだ柳行李を乗せてやって来た。おまけにもらった四角い紙風船を膨らませて手のひらで代わりばんこにポンポンと宙に突いて遊んだっけ。テレビ画像も写真もモノクロームで、チャンネルやカメラも手動操作していた時代は過ぎ去り、わが記憶も薄れゆくばかり。

編集責任者 鈴木春酔

## 穴居想見(編集後記)

昨年の悪夢のような元旦から一年が過ぎ去り、何事もない平凡な新年を迎えられたことは、何よりもありがたい。雪に備え、スタッドレスタイヤに履き替えたが、降ってほしくはない。雪やこんこと喜ぶのは犬と子どもたちだけだ。年に数回ほどしか雪が降らない埼玉県平野部では、10センチ積もると交通機能がマヒしたりスリップ事故が発生するなど大騒ぎになる。



かく言う私も、こんな体験がある。朝日が当たり雨上がりのように濡れて見えた道路でスリップし、車は真横向きになってバス待ちの人たちの前を50メートル以上滑走したのだ。信号待ちの車列が見え、突っ込むなと覚悟を決めると寸前で止まった。皆が眼を見開き口を開けて固唾をのんでいる。そして、最後尾の運転者は、迫りくる恐怖で引きつった顔をしていた。

また、11年前の大雪では、車両通行が途絶えた真っ暗な直線道路を走行中、突如としてスピンした。車体を直進方向に戻したものの、減速しないまま路肩の雪だまりに突っ込んでしまった。運良くいずれの場合も、道路施設に接触しなかったため、車と私も無傷で済んだ。

そう言えば数十年前、溪流釣りの解禁日に釣行したときのことである。見下ろすと足がすくむような大きな砂防堰堤があり、滝つぼのような深みには岩魚や山女魚が集まっている。上と下には、10人ほどの釣り人がいた。私は高いところが苦手なので、下から釣ろうと堰堤わきの魚道の側壁の上を歩いて降りようと一歩踏み出したとたんに、氷に足を滑らせ勢いよく転倒した。釣り人たちは一斉に私を凝視し、口を開けて驚いた顔をしている。数秒に過ぎない時が超スローモーションで進んだ。「転落死したか……」、と他人事のように思い、観念すると身体から魂魄が抜け出したのか？幼少の時のことから転倒直前までのとてつもなく膨大な記憶が一瞬でよみがえり走馬灯のように駆け巡る……意識が戻り堰堤下まで腹ばいで滑り下りた。すると拍手が起こり、「大丈夫か?」、「良かったナ!」と声を掛けられた。私は脱帽して皆に一礼し、今度は慎重に魚道内を登り、平然を装いその場を立ち去った。それでも、決して竿を手離すことなくケガも負わずに生還。そして、現在まで生きながらえ馬齢を重ねている。

秋田釣行では、阿仁川に滑落し指を骨折したナ。今年は上滑りせずに過ごしたい。

福莫大於無禍

(さいわいは、わざわざ無きより大なるはなし)

禍莫大於求福

(禍は、福を求むるより大なるはなし)

編集責任者 鈴木春酔

## ・穴居想見(編集後記)

師走り、猫も走る季節となった。太平洋岸の海面水温が下がりはじめ、大陸高気圧が勢いを増し、ようやく冬が到来したようだ。つい先日、チョット冷え込んでいたので、行きつけの蕎麦屋に入った。小上がりで座ると、私は燗酒とつまみを注文。連れは、ためらわずに鍋焼きうどん。後から来店する客は高齢者ばかりで、鍋焼きを頼む客が多い。入口に、「新蕎麦打ちはじめました。」の張り紙があった。シンプルに盛り蕎麦か、それともいつものカツ重と掛け蕎麦のセットにしようかと迷った末に鴨南蛮蕎麦にした。そこに連れが苦手とする、鍋焼きの具の海老天と鶏肉の塊がカモ汁を浴びにきたものだから、蕎麦通ではない私は喜々として、抜きではないソバと具と酒を存分に味わい、腹鼓を打ち鳴らした。



こんな怠惰な生活習慣を改めることも考えない私とは全く異なり、粗衣粗食の極貧生活を甘受し、常不輕菩薩(じょうふきょうぼさつ)に習い、人々から嫌がられたり罵られ、童らと遊んでばかりいる馬鹿坊主と言われようとも、愚を守り乞食行を貫き通した禅僧が、江戸時代後期の越後にいた。

冬夜長兮冬夜長	冬夜悠々何時明	燈無焰兮炉無炭	只聞枕上夜雨声
とうやながし、とうやながし	冬夜ゆうゆう、いつときがあけん	ともしびにほのおなく、ろにすみなし	ただきくちんじょうやうのこえ
老朽夢易覚	覚来在空堂	堂上一盞燈	挑尽冬夜長
ろうきゅう、ゆめさめやすし	さめきたりて、くどうにあり	どうじょう、いっさんのともしび	かかげつくして、冬夜長し
一思少年時	讀書在空堂	燈火數添油	未厭冬夜長
ひとたびおもう、少年の時	書を読み、空堂にあり	とうかしばしば、あぶらをそえ	いまだ冬夜の長きを、いとわざりしを

その人、良寛和尚の漢詩である。前一首は七言で、次の二首は五言。年老いた僧は、越後の粗末な堂庵に独り起居していた。金持ちや名士からの、漢詩や和歌などの書の買い取りや庇護の申し出も一切断り、乞食でその日を暮らした。和紙や墨を優先してしまったので、暖を取るための炭も一皿の油さえ購えない。どちらも尽きたままの寒い冬の夜長、雨音だけが枕元に聞こえる。そして眠れぬままに、ふと若かりしころを思い出す。ひとりお堂で経典や四書五経を読みふけていると、ぬばたまの冬の夜長が楽しく感じられたことを。

編集責任者 鈴木春酔

## 穴居想見(編集後記)

ゴールデンウィークも早終わり、雨の降る日が多くなった。雨後には、草木の伸びる勢いはさらに増し地面を覆い隠す。麦秋を迎えて藁を焼き焦げるにおいが漂ってくる。「いびい」が嫌ではない。

青葉の山から次なる山を目指しながら、ホトギスが甲高い声を上げて朝も夕べも鳴き続ける。その昔のこと、とても貧乏な兄弟が居ったそうな。弟はとても兄想いであつたと。その兄が病気になり、弟は兄の治癒を願って滋養のある山芋を採ってきては食べさせたが、決して一緒に食事を取ろうとしなかった。すると兄はそれを不審に思



い、「きっと弟の奴め、俺のいないところで、もっとうまいものを腹いっぱい食べているのだろう……胃の中身を確かめてやるゾ!」と、寝ている最中に弟の腹を切り裂くと、なんと胃の中は空っぽ。ふつうは硬くて食わない山芋の茎の部分だけが少し残っていた。兄は驚き、悔やんで山に逃げ込み、嘆きの果てにホトギスに化身したのだという。だから、ホトギスは弟が成仏する日までは、泣き叫びながら飛び続けるのだそうだ。

それはそうと、青葉にホトギスと言えば次は、初ガツオと来る。最近ではスーパーの鮮魚の品質はとても良いので、色鮮やかな背側の赤身を購入して刺身にする。おろしショウガやネギ・ニンニク・ミョウガ・大葉などを刻み、漁師料理に習い刺身の上にタツプリと乗せる。その一切れをツマとともに酢醤油につけ口に運ぶ。人の好みはそれぞれであるが、私は脂の乗った戻りガツオやマグロのトロよりも、淡白なこの初夏の味わいが好きであり、自ずと酒も進む。呑みすぎないようにしなければという自制心に反し、盃を持つ手と徳利を持つ手がカラクリ人形のように勝手に動き、その果てはガラクタ人形にトランスフォームしてしまう。

ほととぎす あすはあの山 こえてゆかう (種田山頭火)

編集責任者 鈴木春酔

## 穴居想見(編集後記)

勸君金屈卮

きみにすすむきんくつし

満酌不須辞

まんじゃくじするをもちいず

花発多風雨

はなひらけばふううおおし

人生足別離

じんせいべつりたる

(唐詩選「勸酒」于武陵 五言絶句)

この春は、例年に比べて雨が多いようだ。雨後には、特に暴風を伴っている。気象庁の高層天気図を見ると、偏西風がここ1か月ほど蛇行を見せずに日本列島の上空に居座り続け、意地悪をしているようにしか思えない。また、海面水温と潮流のデータを読むと、紀伊半島辺りで黒潮の大蛇行が始まり岩手県沖にまで暖流が達している。このままでは、豊かなプランクトンを含む親潮に育てられながら銚子沖まで南下してくるはずのウマイ青魚が、黒潮に阻まれて回遊できず不漁になるのではと、早くも味覚の秋を憂えてしまう。



世のなかに 絶えて桜の なかりせば 春の心は のどけからまし

(古今和歌集:巻一・五三番 在原業平、伊勢物語:八二段)

つい先日、初夏の陽気にいざなわれて散歩に出た。車はほとんど通らない田舎道を歩いていると、すぐ前をツバメが横切り飛び去った。燕尾服を初見したもので何ともうれしくなり足取りも軽やかになる。そして、ソメイヨシノ種としては、この付近で最も早咲きをする桜を見るべく八幡神社に向かう。緑濃い鎮守の森の隙間をかき分けて、淡いピンク色の綿菓子がかんではいないか。木のもとに行き梢を見上げると、芽吹いたばかりの小さな葉が小生意気にも、早く替われと追い立ててあだ花を散らす。花びらはひらひら舞い踊りながら落ちてはこげ茶色の地面にしっとりルージュを乗せる。まことに、ワクワクそわそわさせてくれる花よ、なぜそうも散り急ぐのか。

編集責任者 鈴木春酔

## 穴居想見(編集後記)

新玉の年を迎えた。香ばしい焼き餅の雑煮をこたつで暖まりながら味わう。大病やケガもせず過ごせた去年。こうして、平穏な正月を迎えられ、しみじみありがたいと思っていると、突然テレビでは、新春番組を中止して大地震と津波のニュースを流し、アナウンサーが悲痛な表情で大至急避難するようにと叫び始めた。翌日には大型航空機と海保機が衝突し全焼する事故が発生するという、何たる災厄の年の初めか。東日本大震災の悪夢がよみがえる。



その合間に流される海外のニュースによると相も変わらず、蝸牛角上(かぎゅうかくじょう)の争いが続けられているようだ。

「有國於蝸之左角、曰觸氏。有國於蝸之右角、曰蠻氏。時相與爭地而戰、伏尸數萬。逐北旬有五日後返。」(莊子・則陽篇)

訳すと、

「カタツムリの左の角にある国を触氏といい、右の角の国は蛮氏といいます。ある時、領地を争い相くみす戦となりました。その死者は数万人。逃げる敵を追いかけあうこと十五日の後に、ようやく軍を引き返しました。」

この寓話は、齊の国に戦いを仕掛けようとする梁(魏)の恵王を前に、逸民としてくらす戴晋人(たいしんじん)が語ったもの。話は宇宙の無限の広がりへと転じる。その大宇宙から見る地上の魏や齊など、取るに足りない小さな存在であり、王と蛮氏との違いはいかほどのものなのかと奏上した。恵王はこの話にいたく感動して、戦を思いとどまり、賢人と称えたという。

「莊子」は紀元前三百年以上も前のものとされている思想。竹簡や帛書(はくしょ=絹布に書かれた書)に編綴され、焚書や散逸を免れた写本はわが国にも伝えられた。いろいろな格言や熟語、故事成語などの多くは、古代中国の春秋時代後半から戦国時代に活躍した諸子百家の思想・言論の書物を出典としているので、大いに学び人生の糧にしたい。

そう言えば菜根譚のなかに、「人生一分を減省せば、すなわち一分を超脱す。」、何事にも少し減らしたり省けば、その分だけ苦も減り、気負わず楽に生きられると記している條がある。ことしの抱負はこれに決めた。

編集責任者 鈴木春酔

## 穴居想見(編集後記)

この数年、コロナウイルスは人を冒しただけではなく、慣習を一変させた。季節を彩る年中行事は省かれたり簡素化されたため、日常生活の喜びも少なくなった。仕事が終わりに帰宅すると、手酌で一献傾けながら何とはなしにテレビをつける。芸人やアイドルを寄せ集めただけの内容のない番組ばかり。すぐにニュースに切り替えた。仁義も道理も無い戦争の状況を放送して国際社会の救援を訴えている。国内政治に移ると、沈没しかけている我が大日本丸の船長が、「減税・給付」の錦の旗を高々と掲げて、乗客の命は私が守ると力説する。船の燃料を買う金にも窮する中での大盤振る舞い。しかし、二枚の舌が滑らかさを失うと、瞬時に記憶喪失者に扮する演技はさすが名人芸。正直な方の舌は、座礁ぐらい我慢しろ！と舌打ちをしている。

誠に国を憂い、民のためにその礎とならんとする志士であれば、中国唐の時代の政治家が詠んだ、「憫農(のうをあわれむ)」と題する詩を是非とも覚え、座右の銘にしてもらいたい。

禾鋤日当午 汗滴禾下土 誰知盤中餐 粒粒皆辛苦  
(稲をすき日はごに当たる 汗はしたたるかかの土 誰か知らんばんちゅうのさん  
りゅうりゅう皆しんくなるを) 李伸(唐・宰相)

年の瀬を迎えるなかでの楽しみもある。それは、機械ではあるが餅つきをすること。ついでに間に大ぶりな大根を一本、「辛くなれ！辛くなれ！」と願いながらひたすらにすりおろす。つきあがりのアツアツの餅をちぎっておろし和えにしよう。きな粉をまぶして安倍川もイイナ、と皮算用をしてしまう。口に入れても、胃の腑に収まるまで油断はするまい。



ところで、来年も油やもち米などすべて値上がりをするのであろう。農業は、自分の労賃を含めて生産コストを計算すると、ほとんどの農家の採算は取れていないと思う。一方、庶民生活を知らない老中や悪徳代官が権勢をふるう世では、百姓は生かさず死なさずとばかりに、情け容赦なく年貢を取り立て、さらに賦役を課す。年貢を納められず借金しかない百姓は夜逃げをし、田畑は荒れ野原と化す。正月餅や赤飯に使われるもち米、作り手がいなくなれば更に貴重なものに。すると、貪欲な商人は我先を争って小判を忍ばせた饅頭箱を携え、勘定方に献上して御用達を任される。かくして、もち米の売買を許された商人は、法外な値で売りさばき大いに儲ける。やがて、年の瀬を迎える頃には、もち米騒動も起きかねないほど庶民の手には届かない「黄金モチ」となり、喉も通らなくなるのではないかと、日々杞憂するばかり。

## ・穴居想見(編集後記)

今年の夏の異常な暑さが嘘のように、足早に冬の気配がしのび寄せてきた。落葉は掃えども尽きず朝露に濡れている。葉焼けした茶色が多い。落葉を見つめながらふと、忠七めしに並ぶ、「日本五大名飯」なるものを思い起こした。しかし、深川めし以外の三飯、どの地に生まれたいかなる料理なのか皆目わからず、とても気掛かりになり調べてみた。すると、これは宮内庁が全国各地に伝わる郷土料理を調査して、昭和14年に選定したものとされている。その飯とは、

### ①深川めし(東京深川)

ネギとアサリのむき身を一煮立ちし、味噌などで味を調えた汁をご飯にぶっかけた漁師飯。

### ②うずめ飯(島根県津和野周辺石見地方)

鯛(が無ければ入れない)、ありもの野菜などを刻み炊いてから椀に入れ、その上にご飯をかぶせ煮汁をかけたもの。粗末な汁かけ飯にガッカリ、うずめてある具にニンマリ！する仕掛け。

### ③さより飯(岐阜県可児の山岳地方)

海魚の細魚(サヨリ)ではなく、同じように細長く光り輝くサンマ(昔は塩漬けにしたもの)と地野菜などを一緒に炊いたご飯。この地方では細長い魚をサヨリと呼んでいたという。

### ④かやく飯(大阪府難波地方)

あり合わせの根菜や油あげ、魚介の練り物などを加えて(加薬)炊いたご飯。同じような料理は日本各地に存在し、関東では、炊き込みごはん・五目ご飯・かて飯などと呼んでいる。

### ⑤忠七めし(埼玉県小川町)

わが町の誇る「忠七めし」。ほかの四つの名飯は、風土色豊かな、まさしく郷土料理といえる。しかし、忠七めしは二葉本店のみで供される、白米の飯に山葵(剣)・海苔(禅)・柚子(書)・葱の四種の薬味を添えただけの素朴な出汁かけ飯。

……そこで疑問は深まるばかり。昔は、庶民の生活は貧しく割烹料理店で飲食をすることなどほとんどあり得ない。ましてや婦女子は特にそうであったらう。そのせいか町うちにおいても、家庭の味としては全く普及していない、「忠七めし」。それがなぜ、郷土食として選ばれたのであろうか？推察してみよう。

本館の玄関口に掲げてある、「二葉楼」と彫られた扁額は、幕臣山岡鉄太郎(号:鉄舟)の書をもとに彫られたもの。鉄太郎は、江戸城無血開城へ向けて従者一人を連れ、西郷隆盛率いる薩摩の大軍が駐留する駿府に乗り込み、直談判に挑んだ豪傑。「忠七めし」の命名者である。数年後、明治政府参議西郷のたつての頼みを受け、明治天皇の侍従となり剛直に至誠を尽くした。

昭和14年、五大名飯が定められたこの年に第2次世界大戦が勃発し、米穀配給統制法が公布され、米はすべて強制買い上げとなり食糧不足が始まった。そこで、全国民に粗食を受け容れさせるため、有り物を使い手早く作れる四種の家庭料理を名飯と称賛して示し、更に、若き明治天皇が信頼を置いた鉄太郎好みの、一番質素な汁かけ飯を当然にして選んだのではないか。



## 穴居想見(編集後記)

最近、讃岐うどんに対抗するかのよう、「武蔵野うどん」と称する太くて硬い手打ちうどんが人気になっている。豚バラ肉と長ネギなどを醤油で味付けし煮立たせた、甘辛濃厚アツアツの汁に浸けて頂くのが一般的であり、私も好きである。そして、孫たちもメンメンが大好き。しかし、武蔵野うどんの強いコシは小さな子どもには硬すぎるので、孫を連れているときは泣く泣く店の前を通り過ぎることになる。

ここ小川も昔から小麦の生産地であり、江戸時代には製粉用の水車が数か所があり、農家の副業として盛んに素麺が製造されていた。ゴマ油を使い手延べした素麺は香りが良いことから評判となり、大和三輪産に負けないブランド力を誇ったという。「小川そうめん」は、川越を経由して大消費地の江戸に出荷され人気を博したとの記録が残されている。



時代は下り昭和に入ると、農家の各家庭ではうどんを打って夕食にすることが多かったという。うどんには、旬の野菜を茹でて糧(かて)として添えられた。また、ハレ(晴れ)の日など人寄せの日にも、大量のうどんが振る舞われた。当時の小麦は主に、「農林61号」(国が開発した品種を、佐賀県の試験場がさらに10年をかけて優良株の選抜育種を続け、昭和19年に品種が固定)と呼ばれるもので、この粉をこねて打つとやや茶色っぽくて見栄えはよろしくないものの香りや味わいが豊かなので、いまだにうどん好きや年配の方に好まれている。

近年、埼玉近隣各県は、「さとのそら」(群馬県の試験場が開発)を推奨品種として指定した。すると、61号の栽培面積は一気に激減。いまや、61号の美味しさを知る農家が自家消費ないし、業者に頼まれて栽培する程度という、希少性のある「地粉」になってしまった。

私個人としては、61号と「あやひかり」(埼玉県の試験場が開発したうどん向けの品種)をブレンドしているという、とある店のうどんが好みである。それは風味、ほど良い歯ごたえに喉越しと、双方のいいとこ取りをしたもの。やや縮れ麺に仕立ててあるので汁が絡みやすい。普通のツユでも十分美味しいものだから、孫も一人前をペロッと平らげてしまう。私はというと、いつもキノコ汁を注文。シイタケや長ネギなどを炒めて香りを引き出し、そこに汁を加え一煮立ちさせた熱々の汁の中に、冷々のうどんをドゥプリと浸けて食べる……アチッ！ウマッ！

店の経営主は小川町の方だと聞き及ぶ。町内にも店を出してくれないかな。

## 穴居想見(編集後記)

町の中には、秩父街道(現在の国道254号線及び県道熊谷小川秩父線)が東西を貫いている。これに沿って建ち並ぶ町屋裏に南裏通り・北裏通りと呼ばれている細い路地が蛇行しながら通っている。自動車の無い時代のそれらの道幅は六尺から九尺(1.8~2.7メートル)ほどであったと思われる。その道に沿って用水や排水の堀がある。今はアスファルト舗装され蓋が掛けられて車が通れるようになったが、一部はいまだに狭くて通れない。



北裏通りには、財を成した商家などの土蔵が点在し、白の土壁と黒い板とのコントラストが美しい塀が通り沿いにあり、昔の風情が保たれた万葉歌碑をたどる小径となっている。一方、南裏通りは栃本堰から分流するために開削された水路に沿って作られており、一部は、かつて色町だったというが、今その面影はない。それら南北の路地から秩父街道に出るための更に狭い路地がところどころにあり、私は、いつもこの路地裏周辺の逍遥を楽しんでいる。

この路地周辺には、大きな寺社が一つもなく木陰がないので、夏の散歩は大汗をかくことになる。しかし、火伏の神を祀る三峯神社の小さな祠や祇園屋台を保管する倉庫などを見つけたり、川岸の際に立ち水面側を向く由来不明のお地蔵様に遭遇したりと、見るに事欠かない。ところで一番の不思議は、路地裏にはつきものの猫に、一度も出会ったことがない。

編集責任者 鈴木春酔

## 穴居想見(編集後記)

今年の夏は、蚊に刺されることが少なかった。きっと、異常な暑さによって溜水も湯になり、ボウフラも生きられないのであろう。ようやく彼岸を過ぎて気温が下がり、心地良く眠れるようになったら、蚊が増えてきた。さらに気温が下がり、鍋焼きうどんを食べたくなるような寒さが待ち遠しい。

そのような茹るような暑さのさなかに、図らずも私は誰かさんからコロナウイルスをもらい

受けてしまった。最高40度2分、高熱とともに四昼夜に渡りむせ返る大きな咳が止まらなかったため腹筋けいれんを起こし、幾度となく彼岸へ渡る悪夢にうなされた。平癒後の今も、脚力の衰えと全身の倦怠感を引きずっている。味覚もおかしくなり、ようやく元に戻ってきたが、取りあえずビールのうまさを感じなくなってしまった。テレビでも味覚障害などの後遺症が残ることがあると、幾度となく放送していたものの他人事で聞き流した症状がわが身に降りかかろうとは。実に忌々しい。

ところで私は、以前から自分への褒美として週に一度は、大衆向けの飲食店でウマイものを喰うことにしている。昔はガイドブックなどを頼りに店を探していたが、今はスマートフォンを操作して情報を検索すれば、安くて美味しいと評判の飲食店のメニューと場所が即座に分かる。目当ての店に入り着席するや、先ずは品書きの値段を見比べて即座に、「せんべろ」料理2~3品と般若湯を頼む。甘露々と心の中でつぶやき、料理を少しずつつまみながら、もう一本頼もうか思い悩む。注文した本日のおすすめ定食が運ばれてくるまで、しばし待つのもまた楽しからずや。「貪(とん)・瞋(じん)・癡(ち)」の三毒の汚れは一生はらえぬか。



編集責任者 鈴木春酔

## 穴居想見(編集後記)

昨今テレビでは、マイナンバーカードやらマイナンバー保険証を作れと放送することしきり。普及促進のための経費として、令和5年度の補正予算総額は887億円だと伝えられている。また、国の借金は過去最大の1,270兆4,990億円だと報じられた。政権に関わる者たちは自分の懐は痛まないのだから、浪費は美德とばかりに見えない札束やら証券を濫発し、債務を積み重ねている。これでは国民の金銭感覚がマヒしても仕方あるまい。

さらに、政府は内閣支持率を上げようと躍起となり、やたらと〇〇給付金とか中身の無い場当たり政策ばかりをおこなっているが、私のところには、バラまいた一万円札は舞い降りて来ないので、汗して食い扶持を稼ぐしかない。

はたらけど、はたらけど猶、わがくらし、楽にならざり。生活費を切り詰め、粟の飯やアカザのお浸しを食べなくとも済むように暮らしているのに、年金からも税金を徴するなんて、鬼の悪代官のような所業だと思う。

それにしても、霊長目・政治科・センセイ属に分類され、サルよりも知恵があるとみなされている種属がいるが、シミン属よりも感覚器官が退化してしまったようだ。そして、「パーティ券収入＝裏金＝非課税」

という、シミン属には理解できない荒唐無稽で特権的なルールを作り上げ、金儲けのパーティー社会で過ごすうちに、シミン属に足を向けて寝たところで何が悪いと開き直り、一族の長の統率も及ばない烏合の集団となった。

おさらいをすると、一万円札を積み上げた高さ、富士の高嶺は3,776億円なり。1兆円は高さ10キロメートルなり。わが国の膨大なる借金はすでに、宇宙空間と定義されている高度100キロメートルに飛び出しており、目指すところは月なのではないか。



編集責任者 鈴木春酔

## 穴居想見(編集後記)

今年の夏は全くもって異常高温が続き、脳内でみそ汁ができそうであった。しかし、暑さ寒さも彼岸までとはよく言ったもので、先日の夜半は急激に冷え込み寒くて目が覚めてしまった。けれども猛暑がぶり返すとこのままでは、山の恵みである天然のキノコは生えないのではと、私はおろおろとするばかり。

天然キノコの嗜好は、地方や県民性がよくあらわれる。私もキノコ全般が好物であるが、長野では、「リコボウ」あるいは「ジコボウ」と呼ぶ傘がヌラヌラとした「花イグチ」をこよなく愛し、スーパーでも売られている。また、栃木県民の多くの人々は、お盆のころになると、そわそわとして落ち着きがなくなるという。地元では「チタケ」と呼ぶキノコが発生してくるからである。この食菌は、傘がビロード状の赤茶色をしており見た目も美しく、ちょっとでも手を触れると「乳」のように白い粘液を出すため



ベニイグチの成菌 (食/毒不明)

この名がついた。醤油・ナス・油ととても相性がよいので、優しく炒めて汁にする。チタケ本体は旨味のすべてを出し切り役目を終えボソボソの抜け殻となるが、香り高いとても良い出汁となる。この時期にかの地を訪れると、「ちたけ蕎麦」の幟旗がそこら中に立てられており、栃木の人はこの蕎麦を至高のものと信じてやまず、寝ていても夢の中で食べているのではないかと思う。以前、私も大量に採取し喜々として食したことがあり、一瞬にしてこの汁に陶酔し無意識に、「こでんらんねえ〜！」と感嘆の声をもらしてしまった。

さらに、奥深い広葉樹林内を流れる沢沿いでは、「喉やき(け)」と呼ぶ、「剥(む)き茸」が採れる。質の良いものを選び沢水で洗い、雑巾を絞るように水分を抜き軽くして持ち帰らないとその重さに耐えられなくなり捨ててしまおうかと思ったりする。帰宅してから、塩水に浸けて虫抜きをして表面の薄皮を剥いてから、煮ぼうとうにすると最高の味！粘性を持ったゼラチン状の肉質なので、冷まさず無造作に口に入れ飲み込むと、口内を火傷してノドを押さえもがき苦しむことになる。また、「ボリボリ」とか「アマンダレ」と呼ばれる「檜茸」や、「栗茸」など複数の雑キノコと肉類、そして里芋など旬の根菜類と一緒に煮込むと、お玉と鍋底がすり減るほど「うんめえ〜！」ゾ。なお、とても植物繊維が豊富なので、翌日は便座と仲良しになりかねないので注意あれ。

初茸の炊き込みご飯、網茸のおろし和え、ナスと一本占地の油炒めなどと、今までに食した味を思い返していたら、すでに私の頭の中はキノコ鍋と化したようだ。

## 穴居想見(編集後記)

ここ数年、テレビ番組で当町の見どころや味どころを取り上げて頂く機会が増えている。そのPR効果たるや、役所の情報発信の力をはるかに上回るのもとてもありがたい。このような天が与えてくれた時に乗じて、果敢に攻勢をかけない手はないと思う。

一方足元に注意を払うと、小誌を一読したことがない、存在すら知らない職員が多いことに気づく。町の歴史や文化を知らずして町の将来を論ずることなかれ。私としても、温故知新(論語・為政篇)の探求心を持たず、地の利を知らない役人たちへのお任せ行政では不安を覚えてしまう。

株を守りて兎を待つ(韓非子・五蠹)のごとき役人は、秦朝に仕えていたら必ずや罰を与えられるだろう。

天の時は地の利に如かず。地の利は人の和に如かず。(孟子・公孫丑)

スマホを持っている皆さん、すべての者が広報・宣伝マンと心得て、個々人からジモトのとおき情報を発信し、「小川」を知ってもらい、訪れてもらおうではないか。

編集責任者 鈴木春酔



邪鬼は青面金剛に懲らしめられるゾ!



## 穴居想見(編集後記)

世の中に 絶えて桜の なかりせば 春の心は のどけからまし (古今和歌集・在原業平)

今年の桜は咲き急ぎ、子どもたちの入学を歓迎することなく無情にも散ってしまった。

けれども、小川盆地を取り囲む山々は、今まさに新緑に萌えている。パステルのように淡い緑いろの葉は、光りを浴びた手弱女の産毛のように輝く。鶯は春の訪れを素直に喜び、美しい声で「ホー、法華経」とお経を唱え続けている。

全くもって、この季節の小川の景色を知らないとは、実に残念なこと

だと思う。天気の良い日には、ぜひ来町していただきたい。まずは駅前の紺色の建物内にある観光案内所、「むすびめ」に立ち寄り、小誌と観光マップを手に入れることをお勧めする。これを片手に、のどかな郊外を巡るのもよし、街中の路地裏の散歩もまた楽しい。なお、食事処や休憩所が少ないので、「むすびめ」に立ち寄った際には、営業日や位置を確認しておいた方がよい。

春は美しくはかない。新緑の葉も日増しに緑が深まっていく。いまこの時を、鶯のように謳歌しよう。



編集責任者 鈴木春酔



## 穴居想見(編集後記)

探 春(はるをさぐる)

たいえき  
戴益

しゅうじつ たず じょうれいとう は いくちよう  
終日春を尋ねて春を見ず 杖藜踏破す幾重の雲

きらい ばいしよう と み  
归来し試みに梅梢を把りて看れば

しとう すで  
春は枝頭に在りて己に十分 (七言絶句)

先日、北風が吹き付けるなか散歩した。まだアカザの杖を必要とはしないが、手はかじかみ自然に背が丸くなり、視線が下ってしまう。路傍には、狂い咲きし霜にやられたぺんぺん草、春を早とちりした仏の座(春の七草とは別種)が紫紅色の小花をまばらに付け、枯草の中ではタンポポが鮮やかな黄色い花を一輪だけ付けて目立とうとしている。まだ、ミツバチは飛び回っていない、もう少しの間寒さをこらえて！

そのような野辺にあって、清涼飲料水の空カンやペットボトルが無造作に投げ捨てられていたり、見たくもない犬のフンを見て大いに憤慨する。これをお前さん、自分の家や庭先でやられたらどう感じる？……こうした仕業を何も考えず平然と行っている輩の脳みそは、きっとスポンジフォームのように空洞だらけになっているのではないかと思うのは私だけであろうか。

不快を覚え幻滅しつつも、その後は意識して背筋を伸ばし歩き続けると、かなたより四君子の梅が早く来よと白い花を魅せいざない、清らかな香りで迎えてくれた。



編集責任者 鈴木春酔



## 穴居想見(編集後記)

### 「村夜」 白居易

霜草は蒼蒼として虫は切切 村南村北行人  
絶ゆ 独り門前を出でて野田を望めば 月  
明らかにして蕎麦花雪の如し (七言絶句)

秋蕎麦の季節になった。私は「通」ではないので、蕎麦の先っぽだけに汁を少し付けるといふ落語の真似はしない。汁の塩梅(あんばい)を確かめてから好きなように浸け、麺の歯応えを楽しみながら味わうことにしている。

元々蕎麦は、稲も麦も育たない石ころだらけの痩せ地でも育つ救荒作物の一つなのだから粋がって食べるものではない。その昔は、粉を湯で溶いて団子やすいとんに仕立てたり、太麺しか打てなかったため茹でたり蒸して食べていたという。しかし、小麦粉をつなぎにして打ち延ばす蕎麦切りの技法が考え出されてから、広く庶民に好まれる食べ物となった。

最近、玄蕎麦から汁の原材料など全てを厳選し、とても美味しい蕎麦を出す価値も張る高級店が増えた。そのような店の暖簾をくぐり、「大盛り」を注文。待つこと暫し、上品に盛られた蕎麦が運ばれてきた途端、「エッ！これって大盛？……。」と、凝視し絶望感に襲われたことがある。気を取り直し食することもの数十秒、三回ほど手繰っただけで無くなった……簾(すだれ)を見つめつつ心の中で叫ぶ。「あ～腹減った。駅の天玉が喰いテ～！」と。

朝晩大分冷え込むようになり、平野部にも霜の降りる日は近い。そんな寒い日は、うどんもカツ丼もある昔ながらの「普通」の店に入り、まずは板わさをつまみに熱燗を一杯、そして鴨南蛮を啜るとしよう。



編集責任者 鈴木春酔



## 穴居想見(編集後記)

気づけば既に「白露」を迎え、これまでの猛暑は遠のき鳴く蝉も声の主は代わり、弱々しく物悲しい。夕暮れ時になると澄み切った虫の音とともに涼が忍び寄り、あくる朝には庭先に咲く萩の花びらにも露が宿っている。

しかし、まったく今のグレゴリオ(新)暦では秋の実感が湧かない。これも時の政府が、西欧の先進国に仲間入りしたいがために、日本の気候風土に即して作り上げられた旧暦(明治5年までは国内に18ほどの地方の暦があったようだ)を捨て去り、明治6年に新暦を採用した結果か。

二十四節気(にじゅうしせつき)と七十二候(しちじゅうにこう)は、紀元前5世紀の古代中国において集成したとされる農作業用の暦の季節分けで、倭の国には平安時代に唐から伝来したらしい。暦が作られた中国内陸部の乾燥した気候風土と異なり、倭の国には豊富な水が織りなす自然、四季の移ろいがある。古人はそれに合わせて暦を改訂し、さらには繊細な感受性と観察力によって、「節分」、「彼岸」、「八十八夜」、「入梅」など九つの雑節を考え出して加え、完璧なる倭の暦に仕立てた。

この暦に従って、年中行事や祭礼などは連綿と執り行われ、継承されてきた。新暦になってから約150年が経ち、昨今、日本の誇る国風文化は顧みられなくなる風潮にある。季節感の乏しいカレンダーでは年中行事すら失われてしまうのではと危惧しているのは筆者だけか。

カレンダーの製造業界の方々をお願いしたい。二十四節気・七十二候・雑節はいつまでも残してほしい、それも大きな文字に注釈を添えて。



こぼるるや すくいとりたし 萩の花

編集責任者 鈴木春酔



## 穴居想見(編集後記)

既に8月7日、秋が立ったというのに陽射しはいよいよ強く、蝉の鳴き声もやかましいばかり。まったく今のグレゴリオ(新)暦では秋の実感が湧かない。これも時の政府が、西欧の先進国に仲間入りしたいがために、日本の気候風土に即して作り上げられた旧暦(明治5年までは国内に18ほどの地方の暦があったようだ)を捨て去り、明治6年に新暦を採用した結果か。

二十四節気(にじゅうしせつき)と七十二候(しちじゅうにこう)は、紀元前5世紀の古代中国において集成したとされる農作業用の暦の季節分けで、倭の国には平安時代に唐から伝来したらしい。暦が作られた中国内陸部の乾燥した気候風土と異なり、倭の国には豊富な水が織りなす自然、四季の移ろいがある。古人はそれに合わせて暦を改訂し、さらには繊細な感受性と観察力によって、「節分」、「彼岸」、「八十八夜」、「入梅」など九つの雑節を考え出して加え、完璧なる倭の暦に仕立てた。

この暦に従って、年中行事や祭礼などは連綿と執り行われ、継承されてきた。新暦になってから約150年が経ち、昨今、日本の誇る国風文化は顧みられなくなる風潮にある。季節感の乏しいカレンダーでは年中行事すら失われてしまうのではと危惧しているのは筆者だけか。

カレンダーの製造業界の方々をお願いしたい。二十四節気・七十二候・雑節はいつまでも残してほしい、それも大きな文字に注釈を添えて。



昼下がり 広場にそそぐ 蝉時雨

編集責任者 鈴木春酔



## 穴居想見(編集後記)

暑い夏がぶり返しやってきた。散策の途中、元気なはずの蝉が道路で仰向けになり、まさに虫の息になって羽根を震わせている。哀れあわれなり。

哀れなることは人も同じ。いつもコロナという流行り病に脅かされ恐れおののくこと久しく、三年にも至ろうとしている。そこで私も、悪い疫病の退散を八坂神社におわす牛頭天王(ゴズテンノウ)と氷川神社におわす素戔嗚尊(スサノオノミコト)に祈りお願いしたのだが、一向に終息する気配はない。

己んぬる哉、それならば人いきれを避け一人、冷たい麦酒を飲み喉を潤すことにしよう……するとすぐに汗となって流れ落ち、思考も一緒に流れ出てしまった。



山百合の甘い香りと美しい花笑み独り占め

編集責任者 鈴木春酔



## 穴居想見(編集後記)

梅雨明けの余りの速さに驚き、梅雨寒の頃が懐かしく思える日々。陽の光は有難いものだがとても強すぎて、人も植物も生気を失いかけている。特に気の毒なのはアジサイの花……はて？水と樹陰を好む花なのに何故、「陽」の花なのか？さっそく調べてみた。すると、中国唐の時代の詩人、「白居易(白楽天)」が紫色の花を詠んだ漢詩に由来することが分かった。その名無しの花に与えた名が「紫陽花」とされ、名のおり陽だまりを好む紫色の花なので大和の国の花とは別種である。



額紫陽花(城ヶ崎に自生する山アジサイ)

一方、大和の国では山アジサイの薄藍色の花をさして、「集真藍(あつまる・さ・あい→「あづさい」に転訛)」と名付けたらしい。この花、万葉集には二首しか詠われていない。それぞれ「味狭藍」、「安治佐為」と別の漢字を当てている。どうもこの花のイメージが伝わらないな……そこで平安時代の大学者であって三十六歌仙の一人、源順さんはひらめいた。表音・表意漢字のルールを無視したとしても、異をとなえる者は居るまい。尊崇する白楽天様が付けた花の名をお借りしようと、「紫陽花」の字を無理やり当てはめてしまったからだとか。

我が穴居の紫陽花も花びら(装飾花)を白から青へ、あるいは紅にと色の変化を見せ楽しませてくれる。毎日眺めていても飽くことはない。さあ、たっぷり水をあげるから飲みなさい。



編集責任者 鈴木春酔